

第六十回

東京地区教員研修会

日本私立小学校連合会

令和5年度

教育研修集録

第60回東京地区教員研修会
会 場 明 星 小 学 校

一般財団法人 私学研修福祉会
日本私立小学校連合会

439

ワークショップ「祭りの音を楽しむ」

日 時 令和5年6月2日(金)
会 場 明星小学校(中・高校音楽室)
参加者 85名
講 師 倉 谷 仙太郎(神楽師)
司 会 室 伏 唯 史(学習院)
記 録 松 井 彰 子(宝 仙)

◇はじめに

今回の研究会は「祭囃子の指導にあたって」というテーマにおいて、神楽師の倉谷仙太郎先生のご指導の下、行われた。倉谷先生は、江戸曲独楽を始め、江戸祭囃子、獅子舞、神楽太鼓、笛等の普及伝承活動の他、その調査研究にも精力的に取り組まれている。他にも、各地の祭礼での演奏や、横浜やっしや鯛、明神神楽会の指導も行われている。



今回は、前半に江戸祭囃子、神輿囃子の解説、後半に神輿囃子の実技指導をしていただいた。我々音楽の教員の中でも、祭囃子の専門知識を持った指導者は少なく、授業で扱うにあたり非常に予習を要する分野である。本日の研修を通して、祭囃子の知識と基礎を習得することとした。

◇研修会概要

1. 江戸祭囃子の解説

江戸祭囃子は、江戸時代に香取大明神（現在の葛西神社）の神主が、村内の若者を集め、和歌に合わせて音律工夫した「和歌囃子」を教えたのが始まりと

言われている。それが葛西囃子となり、後に神田、目黒、阿佐ヶ谷等に広まっていった。江戸祭囃子は、祭礼の場でお囃子だけを聴かせる場合と、お神輿など様々な条件に合わせて囃す場合とがある。

祭囃子の構成は、大太鼓が1人、締太鼓が2人、鉦（四助）が1人、指揮者の役割となる笛が1人、の5人から成り、5人囃子とも呼ばれる。

2. 祭囃子の譜面の読み方

元々、祭囃子における譜面は存在しない。師匠の口唱歌を耳で覚えながら伝承されてきた。今回資料としていただいた譜面は倉谷先生のオリジナルのもので、様々な場で指導される際に有効的に活用されている。

我々が普段目にする五線譜とはまるで違う読み方である。漢字、ひらがな、カタカナ、数字を用いて、パート別に縦書き表記されている。

唱歌（口伝）する際に、なまった歌い方をしてはいけない。太鼓の音色を表すべくその言葉が用いられているため、抑揚には十分気を付ける必要がある。祭囃子には演奏の終わりが決められておらず、決まった笛の音色が聴こえたら終末の旋律に入る。それまでは何度も繰り返し演奏する。

[illegible]

3. 実技指導

〈口唱歌〉

我々は笛、小太鼓（一の介）、小太鼓（二の介）、大太鼓、鉦のパートに分かれて唱歌した。笛の口唱歌において、ヒヤヒュヒョは、指をぴよこびよこ一瞬跳ねる奏法を示し、ラリルレロは、指を一瞬はたく奏法を示す。笛はリコーダー指導のように指番号で歌うことも出来る気がするが、指番号で歌うのと、唱歌（カタカナ）で歌うのとでは、音のニュアンスが全く変わる。それは、日本人の脳が持つ世界でも稀な特質に理由がある。右脳は音楽脳、左脳は言語脳であることは西洋人も同じだが、虫の鳴き声も楽器の音色も、西洋人は音楽脳で聴くのに対し、日本人は言語脳で聴くことができる。よって、譜面を言葉で覚えていくのが適している。

〈楽器に触れる〉

- ・太鼓は中心を叩くといい音（抜ける音）がする。
- ・太鼓は本来「たたく」ではなく、「はたく」ものである。「はたく」とは、はたきをかけるようにグリップを効かせる手の動き。バチをただ振り下ろす「たたく、打つ」動きの時と、音色が全く違っている。
- ・日本の楽器は、馬、ネコ、ヘビ、象牙など、全て自然素材で作られていた。その命に報いるために修行を積み、道具を大切に作る心が受け継がれてきた。



◇質疑応答

○鉦の正しい慣らし方は？

右手にバチ、左手に鉦を持つ。右手の肘は動かさず、チャンチキを持った左手をかぶせるように上下に動かす。左手の人差し指、中指、薬指をチャンチキに添えることで、音の響きを止める。鳴ってない音（空音）を上手く取り入れて、面白く聴かせる。

○楽器が無いときに代用する方法はあるか？

【基本】口唱歌をいかに歌って覚えるか。

【笛】3センチくらいの細い竹に穴をあけて、笛の体験をさせることも出来る。

【鉦】バチを親指と小指にかけて持ち、もう一つのバチでたたく。

○締め太鼓のピッチの合わせ方は？

特に決められた音程はない。演奏者の感覚に寄る。

◇最後に

今回はコロナ渦明けの久々の研修会であり、80名以上が参加するワークショップとなった。威勢良く「おめでとうございます」という江戸祭囃子の決まり台詞から倉谷先生の講演が始まり、祭囃子の解説のみならず、“伝統音楽が受け継がれる中での日本人らしさ”を学ぶ機会にもなった。特に実技の場面では、口唱歌の大合唱や、何度も繰り返し行われた楽器体験など、大勢で受講したことで、より祭囃子の世界を濃く味わうことが出来た。

きっと子どもたちは、今回のような実技体験を、感覚的に、心から楽しみながら取り組めるであろう。その授業の実現のために、何をどのように準備すべきか、今回の研修で十分に学ぶことが出来た。これからを生きる子どもたちに、日本の伝統芸能のすばらしさを少しでも伝えられるように、指導者として日々研鑽していきたい。